

新潟産業大学報

青海波



第8号

発行日 平成8年4月5日
 発行集 新潟産業大学
 新潟県柏崎市軽井川4730番地
 TEL 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

大学の個性化と授業技術

学長 荊木 久 弥



広島大学・
 大学教育研究
 センターが、

一九七九年から数年をかけて行ってきた、「大学教育」に関する共同研究をまとめた「大学教育とは何か」(喜多村和之編)を、拾い読み程度ではあったが、読んでことがあるので、執筆者のテーマだけを幾つか拾ってみると、「大学におけるティーチングとラーニング」[「大学におけるティーチングの組織論」]「大学教育のサービスマデル」[「大学生における学習技術と学習意欲」]「大学教育とカリキュラム論」など、私にはどれも興味あるものであった。私事に互って恐縮ながら、三〇年以上も前に、短期大学で教師生活のスタートを切って以来、私をとりこにして放さなかった課題は、「授業技術」に関わることであった。職場が短大から大学に変わっても、幸か不幸か、未だに私は、自分を学者だと思っただけは一度もない。勉強は決して嫌いではないし、相当量の本も読む。自分の頭で分か

るようなら、その程度の論文も読みあさるし、雑多な文献にもあれこれと目を通す。だがしかし、私はこの種の作業に没頭しても、仮にもこれを「研究」とは思っていない。私の場合、ただひたすら「いい授業をしたい」「聞いてもらえる授業をしたい」との念願を果たすための手段にすぎぬものと割り切っている。学者集団の中にいて、仲間の方々には大変に失礼なことと思いつつも、研究者としてはなく、教育者意識を強く持つ一人の教師として、授業を通じて教育指導の中で、「大学で学ぶことの喜びを知らせたい」と思うこと、これが、取り柄のない私の、教育に賭ける唯一のこだわりなのかも知れない。

「学生の受講態度が悪い」「授業中の私語がひどすぎる」と、どの大学からも、同じような声が聞こえてくるが、大学として、或いは、教授会としてこれにどう対処しているのか、どこからもはっきりとした声は聞こえてこない。私語問題については、以前、大新聞の社説にまで取り上げられたこ

ともあるが、私語の発生が、教師の授業態度とも深く関わりを持つことが指摘されてしまうため、踏み込めないまま、結局は、愚痴をこぼす程度で終わってしまう。私語を多くする原因のすべてが教師側にあるとは思わないが、「授業が面白くない、授業内容が難しい、教師の声が聞こえにくい、講義が単調すぎる、板書が下手である、テキストやノートを読むだけで、教師が一方的に授業を進める、授業のペースが早すぎる、マスプロ授業である」等々が学生側の言い分であるとするならば、一刻も早く授業内容の改善を図るなり、授業技術に点検・配慮を加えるなりして、授業に臨むべきではなからうか。

これは、極く卑近な私語の問題にすぎないが、研究者意識の強い他の大学教師の中には、今もって「研究成果を発表することがすなわち教育に他ならない」といった観念を拭い切れぬまま、授業方法とか授業技術は低次元の問題であるとして、意に介そうとしない教師もいるのであろう。大学教員は、研究者であると同時に教育者であり、同時にまた授業者でもあるはずである。昭和初年の頃、同年



齢人口の五、六%にすぎなかった大学進学者が、今や三五〜四〇%近くにも及んでいるが、大衆化された大学へ集まる学生達のほとんどは、学生生活をエンジョイすることや、人間関係を楽しむことに強い関心を寄せ、学問を中心に置く傾向は残念ながら薄い。一八才人口の激減期を迎え、大学の危機を乗り切るためには、様々な工夫や方策を要するが、学生の心をつかむ個性豊かな授業が提供できるように、授業技術に反省の焦点を当てて見ることも必要であろう。

「学問をする原動力―知的好奇心」



経済学部長 鍋田 英彦

経済学分野に限らないことだが、何かを研究する上で大切なことは「知的好奇心」を強くもつことであらう。これは研究の原動力となる理屈抜きの要素である。人間は程度の差はあっても、誰しもが未知の事柄を知りたい、真理を明らかにしたいと考えるものだが、学問を志すものにとつては、なおさらこの知的好奇心を高める努力が要求される。数学者の藤原正彦氏によれば、幸いなことに、この知的好奇心とは先天的な資質ではなく、誰しもが努力次第で高められるものらしい。むしろ、この資質は学校の成績などとは無関係のようである。たとえペーパーテストには弱くとも、知的好奇心が旺盛であるならば、学問を志す条件は十分に備わっていると見られている。逆に成績が優れていようとも、この知的好奇心が希薄な者は学問の道を志すことは不向きのようにある。

経済学部の学生諸君は知的好奇心をもって現実の経済の動きを見

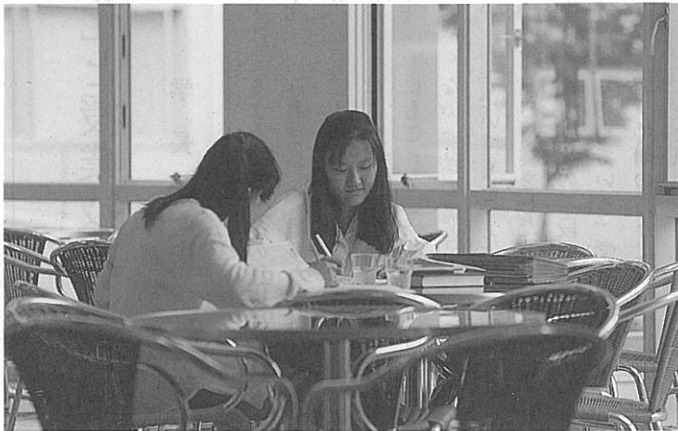
つめ、そこから何か本質的なものを読みとることを心がけてもらいたい。新聞や雑誌、テレビを通して、あるいは街を歩いていても、知的好奇心をかきたてる題材は数多く存在するであらう。

例えば、街角で目にするコンビニエンス・ストアという小売業態が成長を遂げている要因は何なのか。むしろ、それは消費者の支持を得るような品揃え、価格、サービスのフランチャイズ・パッケージを備えているからだが、経済性という視点から見た場合、どのような説明ができるのであろうか。

そのポイントは「ネットワークの経済性」効果にあるようだ。成長企業はフランチャイズ・システムによって独立資本の加盟店を組織しているが、これは情報やノウハウを核とするネットワーク組織を構築することによって、加盟店という外部の経営資源を活用し、本部と加盟店双方のシナジー効果を狙ったものである。上位企業が他の追随を許

さないのは、このフランチャイズ・パッケージとネットワーク力が優れているからであらう。情報ネットワーク時代をむかえて、経済性に対する見方も、これまでの工業化時代における規模の経済性重視の考えから連結（ネットワーク）の経済性を重視する見方が加わってきた。どうやら「ネットワーク」という概念が産業界のキーワードになっていくが、

ネットワーキ時代が描く未来の産業構図とはどのようなものなのか、大いに知的好奇心をかきたててもらいたいものである。



「人文学部第三年次を迎えて」



人文学部長 加藤 榮一

新潟産業大学 人文学部環 日本海文化学 科も本年三月末日で設立以来満二ヶ年を経過しました。この間、いろいろ試行錯誤を重ねながらも学部完成年度へ向けて教育内容の充実と学習環境の改善に教員・事務職員一同、鋭意努力をかさねてきました。この四月の新学期からは、

いよいよ専門課程の講義もはじまります。教務委員会のスタッフの先生がたをはじめ、われわれ教員は大いに気を引きしめて専門教育の充実に取り組んでいます。もとより、大学は教育の場であると同時に専門的研究の場でもあります。大学の教育は、これを担当される先生がたの研究活動とその成果を基礎にして成り立っています。学生諸君は先生がたが永年にわたって蓄積された研究成果をもとに提供される講義につらなり、専門教育を受けると同時に、その講義に諸君が積極的に参加することによって、大学での研究活動の一翼を担うこととなります。それが学生諸君自身の研究活動で

もありません。という訳で、これからの二ヶ年間は学部の完成年度に向けて、大学のアカデミックな環境をさらに整備し内容を深める努力を払いたいと願っています。さて、人文学部第三年次を迎えて、さらなる課題の一つに就職問題への取り組みがあります。就職の問題は、大学の教職員の非常な努力が必要であることは云うまでもないことですが、同時に自分の進路を自分の考えで決めるとい学生諸君自身の努力と主体性にかかわる問題でもあります。その意味で、環日本海文化学科で四年間に諸君が学んだことを就職のさいの武器として役立てることができるよう、われわれは学生諸君と一緒に考えて、努力していきたいと思

います。とりわけ、本学科のカリキュラムの特色でもある外国語教育をフルに活かして、環日本海文化圏の諸国語やその他の外国語を十分に自分のものとしていただきたいと思います。

柏崎にて

前教務部長 山崎 一輝

先日、久々に海を見て来た。柏崎にいと、近くにあると思うせいか、あまり見ようとしなくなっていた。とくに冬の海は：

海の遠くに暮らしていたときは、ただ海を見る為だけに、骨折りをしてさえも、訪ね回ったものである。そのころのことがなつかしくもあり、自分の変わりように驚きもした。しかし、どうも人は、

近くにあるときにはめずらしくとも何ともなくなるせいか、気が届かなくなるものかもしれない。柏崎は何と言っても、海の町である。山もあり、川もある。人も住んでいる。しかし、やはり、海の町なのだ。私たちのこの大学は、海の町にあるといえる。

柏崎について、ゼミの学生たちにきいた。意外な答がかえってきた。入学当初は、あまりに小さな町で落ちこんでいたというが、卒業するころにはまあ好きになってきたというのである。どこがいいと言うわけではないらしい。学生諸君のすべてがそのように感じられるわけではないだろうが、確かに彼らの言うように、おだやかな魅力というものがある。多感なころに、海と共にあるということ、それだけで意味があると思うのだが、まあこの主張はあまりにも主観的に過ぎるのかもしれない。さて、我々大学人にとって、地元とどのようにかわるべきなのだろうか。たまたま、柏崎市の生

行動する産大生達

前学生会副委員長 廣川 俊男

大学に入学したということは、それぞれの専門分野やより高い教育について学ぶ機会を得たと言う事に他ならないが、同時に、自由にそして創造的に費やすことが可能な4年間を得たということにもなる、と私は考える。

開学して9年目と、まだ新しい新潟産業大学だが、充実感の伝わってくるような学生の動きも多く見えるようになってきた。まず、行動範囲の「国際化」である。大学が窓口になる中国とアメリカ

カへの短期留学は年を追うごとに希望者が増えてきているが、これ以外にも、自分自身で手続きし、春夏冬の休みを利用して留学する例もかなりある。また、大学や語学学校などに入るのではなく、観光や探検を目的とした自由な旅に出かけるケースもあるようだ。4年間で8回海外旅行した学生もいる。「オーロラを見ました：：：」とか「チベットに行きます：：：」などと聞くと、つい羨ましくなってしまう。本学の留学生の帰

た。入学当初は、あまりに小さな町で落ちこんでいたというが、卒業するころにはまあ好きになってきたというのである。どこがいいと言うわけではないらしい。学生諸君のすべてがそのように感じられるわけではないだろうが、確かに彼らの言うように、おだやかな魅力というものがある。多感なころに、海と共にあるということ、それだけで意味があると思うのだが、まあこの主張はあまりにも主観的に過ぎるのかもしれない。さて、我々大学人にとって、地元とどのようにかわるべきなのだろうか。たまたま、柏崎市の生

涯学習推進会議のメンバーに入っていたとき、途中からは会長として、多くの方々と生涯学習のことで話を聞く機会をもった。柏崎のように自然に恵まれた土地に暮らしてなおかつ知的な生活が可能であるとすれば、人間の環境にとつてこれ程好ましいことは無い。自然に恵まれた地というのは、ともすると暮らしには不便であったものである。しかし、これからはどうだろうか。あふれるばかりの日の光、おいしい空気と水。美しい景観と広い土地。新鮮な野菜と魚：：： 柏崎に住むということは、そういうことである。そこに知的な

情報と刺激が加わることになるのかどうか。かつては無理であったとしても、これからは目をつむっても明らかである。インターネットの急速な広がりが情報の流れを変えている。海の町は、大学の町にもなり、学生や先生が往来する。生涯学習とのかかわりひとつとつても、大学は開かれて行くのだろう。しかし、近くにあると、ともすると見えなくなってしまうようでは困る。重要なことは大学開放ではなく、開放を通して得られる地元と大学との意義のある関係である。

留学雑感—大学教育とアメリカ人—

経済学部 助教授 沼岡 努

一昨年の夏から一年間、アメリカ南部の田舎町チャペル・ヒルでアメリカ史の研究調査を行う機会を大学からいただいた。首都ワシントンの南約350kmに位置するノース・カロライナ州のほぼ中央部、ピードモント台地がゆるやかに起伏し、松やオークの巨木が鬱蒼と繁っている緑豊かな環境の中に人口4万5千の小さな大学町チャペル・ヒルがあった。

籍を置いたノース・カロライナ大学は学生数2万2千で、州立大学としてはさ程大きな方でもなかった。日本ではマンモス大学に属するのだから、授業は少人数制の原則に貫かれていた。大学教育に関して特に印象に残ったのは、教員、学生両者がそれぞれの立場から大学に対し、研究・教育を実践する、ないしは教育を受ける最良の環境を当然の権利として強く主張、要求し、また大学側もそれらの要望に応えるべく積極的に努力しているその姿勢だった。

「大学作り」に教員、学生、大学運営陣、この三者が各々の立場で実に積極的に、献身的なまでに

貢献しているその姿を見て、ふと、酷寒のさなか新大陸に渡って来たピュリタンたちが疫病や餓死の恐怖の中、相互扶助の精神の下「神の国建設」に向って着々と歩みを進めていった植民地初期の歴史の一幕を想起した。他人への思いやり、親切などの具体的実践を通して自らの精神を練磨し、高度な人格形成に励みながら目標に向かって突き進んでいくこととする心的態度は、宗派の枠を超えていつの時代にもアメリカ人が等しく心にとどめてきたキリスト教的精神のように思われる。

人生に対するこうした積極的姿勢は、日常生活では例えば、「Can I help you?」という言葉となつて表れる。これは彼らにとつ

ては単なる挨拶言葉ではない。困っている人をとことん「助けてあげよう」という自己修養に根ざした言葉なのだ。滞在中わたしはこの言葉を毎日何度も耳にした。時には史料捜しに困っているわたしに歩み寄り、懇切丁寧に、だが幾分得意顔で説明してくれるアーキヴィストに悪乗りし、本来自分がやるべき仕事を短時間で片付けてもらったりすることもあった。史料探索が殊の外順調だった(?)のはこのおかげかも知れない。



オールド・ウェル
ノースカロライナ大学
中国の創設時からのシンボル

キャンパスから

経済学部経済学科4年

松田直久

私はなぜ大学という進路を選んだのかと、ふと考えることがあります。人それぞれの想いがあると思います。例えば、就職を有利にする為、友達を作る為など他にもいろいろあるでしょう。私が行き着いた理由としては前に挙げたものももちろんですが一番は、社会に出る前に一人の人間として少しでも成長したいという気持ちがあります。大学というものはこういう気持ちを実現させてくれる場所だと思っています。

このような事を考えながら大学3年間を振り返ると、新潟産業大学は私にとってプラスになるものが多かったように感じます。それは生活の面からも勉学の面からも感じとれます。生活の面からブラスされたものといえは遅しです。柏崎という見知らぬ土地で一人暮らしをし、部活動に参加し友達と知り合い自分自身の中の何が変わったように感じました。勉学の面からは探究心が得られました。教えられること以外に自らがさらに深く知りたいという気持ちが生まれ充実感が溢れました。大学4年間、得られるものはあ

っても失うものは少ないと思います。ですからもつと貧欲に色々なものを吸収しようと思っています。

経済学部経済学科4年

眼崎 さとみ

私がこの大学に入学してから、あつという間に三年間が過ぎてしまいました。

入学当時は、大学生活に慣れることに必死でした。高校生のときと違い、授業時間が90分間と長くなり、その内容も専門的で、難しくなっていました。授業では厳しい先生方も、授業を離れたところでは、とても気軽に話をしてくれました。

また、しだいに大学に慣れていくにつれて、たくさんの仲間ができていきました。困った時に、相談のつたり、のつてもらったり、ふざけ合ったり、時にはケンカしたり…。入学してから、サークルや部活動に入らなかつた私が、これまでの学生生活を楽しく過ごさせてくれたのは、この仲間達のおかげです。本当に最高の仲間達です。

そんな私達も、いよいよ就職活動がスタートしました。会社案内の資料を請求したり、企業ガイダンスなどに参加したりしていま

卒業式

—厳粛かつ華やかに—

平成8年3月19日(火)午前10時から柏崎市市民会館大ホールにて第5回卒業式が盛大に挙行された。

今回卒業証書を授与されたのは、経済学部342名であった。式は卒業証書授与のち、学長式辞・来賓祝辞・在校生送辞があり、それをうけて卒業生を代表して江口隆君が謝辞を述べた。卒業式終了後は、在学生で組織する卒

業委員会主催の謝恩パーティーが開催され、卒業生は恩師や学友などとの別れを惜しみながら、それぞれの進路に思いをはせていた。

なお、成績優秀者に贈られる学長賞には佐々木真実さん、文化・スポーツ功労賞には卓球部の高野文子さん、国際交流功労賞には地域との交流に努力した中国出身の張暁東君の3名が選ばれ表彰された。

ウーマンカレッジ開校

「女性と男性が真に認め合い、共に生きるということを考えて、一人の人間としての新しい自分づくりをみんなと一緒に考えていきましょう」いま、風がひかる私からの出発—と題して新潟県教育委員会主催・本学共催の「ウーマンカレッジIN柏崎'95」が本学などを会場として平成7年6月から11月まで合計10講座開催された。

本学からも講師として人文学部光益徹也教授、中目威博教授、安宇植教授、経済学部竹内明眸教授が講演した。柏崎市在住の女性を中心とした幅広い年齢層から延べ

2158人が受講した。各講演者が自分の研究領域と女性をテーマに熱弁を奮い、受講者も熱心に聴講し、活発な討議も行われた。受講者の声を紹介すると「自己啓発できた」「これからの自分の生き方をみつめ直したい」「会社で主人の苦しい立場が理解でき、帰宅したら、ありがたう」といった言葉があった。

現在、このウーマンカレッジの他に、大学と県内市町村との連携により専門的な講座を各地域で実施する「大学等連携講座」というものがある。今年、柿崎町において、本学前木学長が「やさしい



民法講座」と題し講義を行うことになっている。

また、今年には本学独自の公開講座も実施する予定である。これからも、本学を地域の方々にも広く開放し、地域の方々の方々の生涯学習に対するニーズにできる限り応えていくために、本学として何をしなければならぬかを常に考えていきたいと思っている。

す。今年も、昨年以上に厳しいと言われていますが、こういった状況でも、私も含めてみんなが、希望した職場に内定をもらえることを願っています。

大学生活もあと一年で卒業です。悔いが残らないように、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

将来の展望

人文学部環日本海文化学科3年

六川 佳奈子

私は、人文学部の環日本海文化学科に籍を置き、言語だけでなく文化、歴史、民族構成や生活習慣などを勉強しています。

環日本海の国々は、日本にとって日を追うごとに重要な国になりつつあります。しかし親近感を持つこれらの国とのトラブルは、思うよりはるかに多いのです。これは一つの物事に対する考えが、日本とは欧米以上に違うからです。

私は言葉や態度から、その表面からばかりでなく、底にある意図を読みとることが出来る知識や教養を一生懸命身につけ、物事を理解できる国際人になりたいと思っています。

カウンター越しの出会いを想う

図書館司書 植田 啓一

図書館で働くようになって4年が過ぎた。この春に卒業していった学生は、だから自分にとって同級生のようなものだ。顔と名前が一致するだけでなく、親しく言葉を交わすことも多い。カウンター越しに、実に様々な個性を見ることが出来る。

例えば毎日のように図書館に通ってくる学生がいる。嵐の日も大雪の時も、彼は安田からはるばる坂道を歩いてやってくる。テスト前の喧騒も夏休みの静けさも彼には無縁だ。かと思えば、用もないのに話しかけてくる奴もいる。講義が休みになっちゃって、と馴々しくやってきて、ひとしきりダバって去って行く。こちらを友達レベルで考えているに違いない。窓辺で熟睡してバスに乗り遅れる者、返答に窮するほど難しい質問をしてくる者、エトセトラ、エトセトラ……

その彼らも産大を巣立っていった。ほっとしたような、取り残されてしまったような、複雑な気分だ。だからまだ名前も顔も分らない新一年生との出会いを想う。カウンター越しの新たな個性は、どんなエピソードを生み出してくれるだろうか。



平成8年度の入試の概況

入試部長 竹内明眸

平成8年度の本学入学試験は昨年の11月実施の指定校推薦入試に始まり、3月実施のC日程入試を以て全日程を無事終了した。

今冬は例年になく大雪に見舞われたが、幸いにして入試にはさしたる影響もなく、経済学部では昨年を上回る志願者を確保するまでに至った。

全般としては、18歳人口の減少、新設他大学との競合激化などのさまざまな要因が関連し、逆風の入試環境にあったが、経済学部入試の志願者総数は2267名で、対前年度5%増とわずかではあるが健闘した。しかし人文学部入試では昨年より30%の志願者減となり、全国レベルでの傾向である人文系離れ現象を反映する結果となった。入試部では人文学部の認知度を向上させるなど、今後の施策を講ずることで早急に対応する所存である。

こうしたなかでの好材料としては、地元新潟都市部、東海地区および関西地区での志願者の堅調な伸びを維持できた点があげられる。年間を通しての地道な入試広

報活動が実を結んだ結果といえ、今後もさらなる積極的な活動を展開していきたい。

平成9年度入試では、新教育課程での初めての選抜試験となり、各大学入試の独自性がより問われることとなるが、本学においてもさらなる見直しを行い、地元密着型の大学として、また一方ではアジア圏を軸としての国際性も求めて、その布石となりうる入試を展開することとしたい。

〈経済学部〉

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
指定校推薦	約 80	67	67	—
スポーツ推薦	約 10	20	10	—
一般A程	約 100	1,231	303	132/200
センターA日程	約 20	59	27	185/250
一般B程	約 60	538	196	108/200
一般C程	約 20	341	68	131/200
センターC日程	約 10	7	3	185/250
社会人	若干名	0	0	—
帰国子女	若干名	0	0	—
留学生推薦	若干名	3	3	—
合計	300	2,266	677	—

〈人文学部〉

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
指定校推薦	約 27	21	21	—
スポーツ推薦	約 3	4	3	—
一般A程	約 35	256	115	110/200
センターA日程	約 10	27	14	192/250
一般B程	約 15	205	83	124/200
一般C程	約 10	160	61	117/200
センターC日程	約 5	7	5	200/250
社会人	若干名	0	0	—
帰国子女	若干名	0	0	—
留学生推薦	約 45	45	42	—
合計	150	725	344	—

(平成8年3月18日現在)

大学生と健康

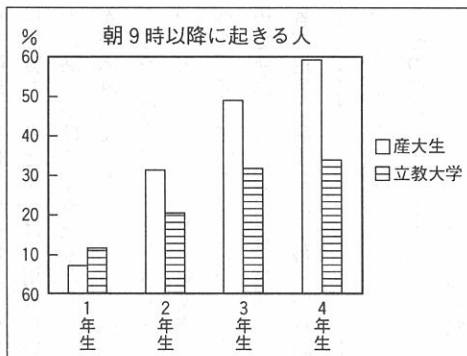
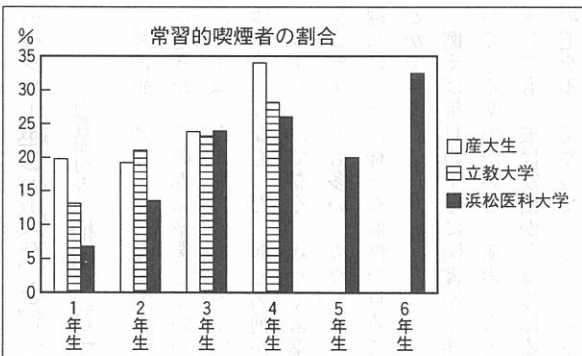
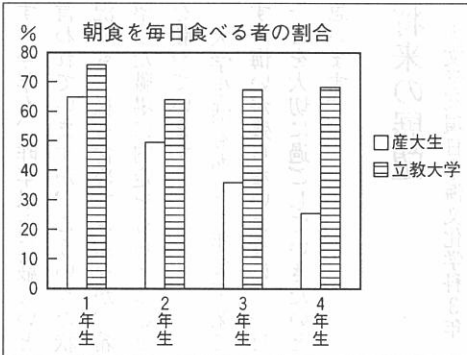
学生課主任 中島 洋子

一般に「大学生」の年代は、一生涯の中で最も病気に罹る率が低く、予備能力があり知的活動も活発な時期です。

しかし、学生の中には自ら選んで健康を害していると考えざるを得ない行動をとる人がいます。健康への過信や認識の欠如がそうさせているのでしょうか。

いずれにしても、一度損ねた健康を元に戻すことは容易ではありませんし、大学時代の喫煙・飲酒習慣、食生活や肥満などは将来へ継続されることが多いのです。

時には若い時代の特権、と羽目をはずすこともあるでしょうが、自分をいたわることも忘れずに。



昨年4月のアンケート調査結果中の一項目を他大学の報告と共に次に示します。調査方法や規模等の違いがあり、単純に比較はできませんが参考にしてください。

超氷河期の就職戦線 産大生96%が内定：就職課から

年の暮れ十二月二十日午後、新潟産業大学の教室は緊張に包まれていた。三年生を対象とした「第一回就職模擬試験」の風景だ。

この日は、入社試験本番の筆記試験を想定した模擬試験デー。静まりかえった大教室の中で、与えられた時間を精一杯使って、一般常識問題と作文に取り組み。「後輩たち、がんばれ」。必死にペンを走らせる三年生たちを、試験監督を手伝う四年生たちが見守っていた。

二年前が「どしゃ降り」、一年前が「氷河期」、そして「超氷河期」と呼ばれた今年度の就職戦線。全国大卒求人倍率も、男子が一・三三倍に、女子にいたっては、〇・四五倍にまで落ち込んでしまった（リクルートリサーチ社調査）。現実に、大卒者だけでなく昨年度約十三万人、今年度が約十五万人の未就労者が出るような状況は、社会問題を通り越して社会不安の火種を抱えているともいえる。特に今年度は、阪神大震災、オウム事件、四月には瞬間的に七九円台を記録した超円高等、歴史的大惨事や暗いニュースばかりが伝えられる中、学生たちは就職活

動を始めなければならなかった。

ところで、新潟産業大学生の進路希望の特徴として、就職希望者の割合が非常に高いことがあげられる。男子の就職希望率が、九二・六パーセント、女子が九三・六パーセント。文部省が調査した全国の大学の数値が、男子七二・八パーセント、女子八〇・八パーセントであるからその違いは歴然。また、この調査結果が就職希望者が減り始める十二月のものであることと考え合わせると、「職につこう」とする本学学生の強い意志がうかがえる。大学院進学または自分自身の生き方に特別な信念を持っているのであれば、将来の夢、人生設計の実現に向けて、卒業する年に就職を決め自立しようとすることは、立派な腹のくくり方といえる。

もうひとつの特徴としては、Uターン就職の希望が極めて高いことがあげられる。本学の過去四年間のUターン就職率は、八五パーセントを超えている。今年度のように、首都圏に集中する大企業の採用力が低下し、首都圏の地方出身学生のUターン志向が強まると、本学学生の就職活動はひと

お厳しさを増す。本学の学生たちも、危機感と競争心を持って早目に取り組んだ。

こうして始まった就職活動は、六月末までは、本学学生の先行部分が悪戦。昨年度の内定率（約二八パーセント）を四ポイント上回った（三二・二パーセント）。本学学生に限らず、早期に内定を得た学生たちは、その後も活動を続け複数の会社から内定を獲得。本学では、多い者で男女各一名が六社に内定し、男女各二名が五社に内定した。滑り出し好調、と思わせた

が、「量より質の厳選採用。予定数未達もやむなし」という企業側のスタンスは崩れず、七月、八月と内定の伸びは鈍り、「超氷河期」が紛れもない現実であることを実感させられた。就職課では、未定者に

月一日現在の内定率（別表②）では、文部省が集計した全国数値よりも、本学男子は四・二ポイント、本学女子では一三・〇ポイントも上回った。この後も徐々に内定率を押し上げ、三月十九日現在（別表①）本学男子が、九五・六パーセント、本学女子はたいへんがんばりを見せ、九七・八パーセントが就職を決めた。

本学内定者のアンケート結果を見ると（グラフ）、就職先の満足度は高く、「大変満足」または「満足」と答えた学生が七〇パーセントを超え、「やや満足」まで加えると九〇パーセントを超えた。学生たちには、「厳選採用の中で選ばれた」、「競争に勝ち残っ

【別表①】平成7年度 新潟産業大学就職状況
(平成8年3月19日現在)

産業分類	内定者数		
	男子	女子	合計
建設・住宅・不動産業	24人	5人	29人
製造業	33人	5人	38人
運輸・通信業	9人	1人	10人
卸売業	49人	5人	54人
小売業	79人	8人	87人
金融・保険・証券業	23人	7人	30人
サービス業	30人	11人	41人
公務員	14人	2人	16人
(ア)就職内定者数合計	261人	44人	305人
未定者数	12人	1人	13人
(イ)就職希望者数	273人	45人	318人
就職を希望しない者(進学等)	22人	2人	24人
卒業生数	295人	47人	342人
(ウ)今年度就職内定率	95.6%	97.8%	95.9%
昨年度就職内定率	97.9%	95.3%	97.5%

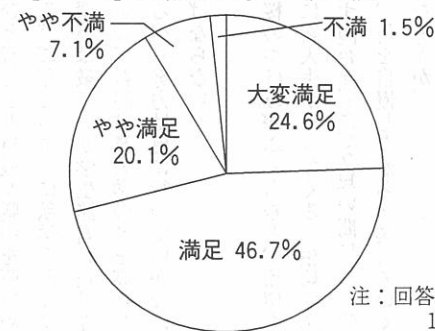
注：(ア)就職内定者数合計÷(イ)就職希望者数=(ウ)就職内定率

【別表②】平成7年度就職内定率の比較

	男子	女子	全体
本学 12月1日現在 内定率	90.1%	86.7%	89.6%
全国 12月1日現在 内定率	85.9%	73.7%	82.0%

注：全国の大学の就職内定率は文部省調査による。

【グラフ】就職先に対する満足度



た」という満足感があるようだ。景気は少しずつ回復に向かっているように見えるが、これはリストラを機軸としたもので、就職難は長期化しそうな気配だ。

国際シンポジウムを振り返って

開催事務局 塩浦 学

国際シンポジウム(第三回アジア太平洋国際シンポジウム)は、ご周知のとおり新潟産業大学を主管校とし、ロシア・ハバロフスク国立経法アカデミー、中国・黒龍江大学及び哈尔滨師範大学、韓国・江原大学及び慶北産業大学との共催により、昨年10月24日から26日の3日間、高円宮殿下のご臨席を賜り、初日がハイブ長岡で基調講演及びパネルディスカッション

を、二日目が新潟産業大学で分科会が、最終日は、外国人招聘者を中心に新潟県内の企業や文化施設等の視察が無事執り行われた。本シンポジウムは、アジア太平洋地域の21世紀の展望として、北東アジア経済問題、北東アジア文化と社会構造、情報通信とマルチメディアの応用等をメインテーマとし、世界7か国41大学及び研究機関から60名の研究者が参加した。

父母の会

一昨年の七月に、学生の教育と福利の増進ならびに家庭と大学との連絡協調などを目的に発足した父母の会も早いもので一年以上がすぎ、ようやく軌道にのって来たところである。

昨年四月時点での会員数は千五百名強。全体の9割である。年間の活動も活発になり、六月の「父母の会総会」には全国各地から出席の多数の父母で本学講堂はうめつくされた。また、今回初の試みであった

「文化講演会」は、学生主催の学園祭とのタイアップもあり、大勢の方々から来場いただいた。講師は人気ニュースキャスターである鳥越俊太郎氏。演題は「世間で一番話題になった阪神大震災やオウム真理教などを盛り込み、「今、何が問題とされているか」というものであった。講演は歯切れの良い語り口とユーモアのセンスたっぶりな話し方で来場の人達はすっかり聞き入っていた。その他に各支部で支部総会を開

また、一般参加者は250名であった。開催事務局の舞台裏では、皆様に汗と苦悩(と苦笑)の連続で、教職員間の心の絆は言いようのない連帯を生むことができたと思う。これを契機に今後、ひとつ目のを同じにし、教職員間の枠を越えて現場を共同で経験できるならば、きっと何かが生まれ、変わるだろう・・・。



き、本学教職員も参加して学生生活や就職に関して保護者と話し合った。新しい「就職・キャリア」三年目に突入する今年は、学生と父母と大学の更なる協調と、学生生活の支援を課題としていきたい。



校友会通信

校友会事務局 苅部 光雄

校友会の会則第2条に「本会は会員相互の親睦を期し、母校の発展を図ることを目的とする。」とあります。この目的の具現化に向けて、事業内容が構築され、実践されております。

◆ ◆ ◆
会員相互の親睦と連携を深めるために、昨年度も、各支部会、同期会、同好会といくつか開催されそれぞれ盛会に行われました。人生の年輪を重ねるにつれ、同窓、同期の絆のありがたさが痛感されるものです。

◆ ◆ ◆
会では、在学生を対象に、次のような事業を行っています。
・ 海外交流事業参加者への資金貸付。
・ 部活動への補助金の交付。
・ 卒業生(新入会員)への卒業記念品の贈呈。
それぞれ有効に活用されております。

◆ ◆ ◆
会員数も今春卒業した新入会員を含め、約五千八百余名にもなり年々増えていき、会の躍進が大きく期待される所です。会員の力の結集を望んでおります。

編集後記

入試課主任 小奈 裕

先日、韓国へ出張した。環日本海文化学科という国際色豊かな学科を有する大学に勤務しているが、初の海外への旅であった。引率(ウ)の教授には迷惑をかけたが、いろいろな事情が理解でき、国際人に一歩近づいた気がした。

卒業式も終わり今年も学生が本学を巣立っていく。毎年思うことだが、本学を卒業したことに誇りをもって、それぞれの地で活躍していただきたい。我々教職員もこの時期は、喜びと寂しさと自戒が胸中を駆けめぐる。ご存じのように私学をとりまく環境は厳しいが学生諸君に負けないうよう、新潟産業大学の名を高らしめるべく努力は更に行っていくかなければならない。

桜のつぼみがふくらむと、希望を胸に新人生がやってくる。柏崎で過ごす四年間という短い間に何を学び、何を自慢しながら卒業していくのだろうか。

よく受験生に言うことだが、大学はお寺の鐘のようなもので、突かなければ音は出ないし、突き手の心意気ひとつで音色が違う。ぜひ素晴らしい音をここから全国、世界に響かせて欲しいものだ。